

養育里親

～もうひとつの家族～

24

坂口 伊都

はじめに

里子は我が家に来てから途切れることなく、いろいろな行動問題を仕掛けてきます。そこには、本人にもわからない何らかの「意味」があるように感じています。

暫くは、家のいろいろなモノを取って、明らかに隠しているという事が続きました。そのモノとは、隠す必要のない食べ終えたお菓子の包み紙から、それは取ってはいけなんでしょうという父のウォークマン等、多岐に渡ります。隠しているモノを見つけても、またすぐに新たなモノが見つかり、間が開かずに次から次へとモノが隠されることが続き、これはアディクションなのか？医療にかかるべきなのか？と真剣に考えもしました。モノを取って隠しても隠した場所を忘れることも多く、収集よりも「隠れて」

することに何らかの意味があるように映ります。何にしても、里子にどう対応していけばいいのか見えずに途方に暮れていました。

そんな時、前号でも書きましたが、CRCのニュースレターの工藤晋平先生のアタッチメントコラムの連載が目にとまりました。

危険や危険のサインに直面すると、子どもは（大人も）くっついて安心したいという「ニード」が高まります。「危険」は大きく3つに分類できます。（1）疲れや病気などの本人の状態、（2）暗がりや見知らぬ人がいるなどの環境の状態、（3）くっつく相手（アタッチメント対象）が物理的・心理的に近づけない状態。この時、人は（1）自分から近づこうとする、あるいは（2）相手を近づけようとする、アタッチメント行動を取ります。これは、危険とニードの高まりを知らせる「シグナル」であるといえます。

もしうまく対応してもらえないことが続くと、行動問題が発達するかもしれません。

という文章が私の目に留まり、腑に落ちてきました。里子のアタッチメント行動が見えにくいのですが、出していないわけではないのです。物心ついた頃から、(3)のアタッチメント対象が物理的・心理的に近づけない状態が続いているのだと仮定したら、家の中でモノを取って隠す、あるいは隠れてする行為には、里子自身を安心させる材料があるのだと解釈できます。それは、大人を頼ろうとしない、あるいは頼る術を知らない、自分を自身で慰めてきた、自分を慰める術として「モノ」や「隠れて」という事がキーワードになっているのかも知れません。

今回は里子の不安と安心について、いろいろ考えていきたいと思います。今回も、どうぞ最後までおつきあい下さい。

家でよく出る行動

家では、モノに関する事の行動問題が続いていました。特別支援学校の担任に相談すると、環境を整えていくことを提案してくれました。家庭だけでなく、学校も放課後等デイサービスでも里子に起こっていることを共通認識し、同じように環境を整えていくことを土台に言い訳をしてうやむやにすることを無くし、本人がそのことについて考えていけるような体制を作ることの大切さを訴えてくれました。放課後等デイサービスにお菓子等何かを持ち帰る時は、連絡帳に書いてもらうようお願いした前例があることも教えていただきました。それを受け、父から放課後等デイサービスに電話をし、この子のいる前で事情を説明し、何か持って帰る場合は連絡帳に記入するようにお願いしました。

同時期に、この子の「安心」は、どこにある

のだろう、どのようなことで安心を得てきたのだろうかと考えるようになりました。それまで、行動の問題にばかり目が向いていましたが、私の視点がそれていき、父がした電話の後も、「自分でも、したらダメとわかっているのだよね。それでも止められないのなら、一人で何とかしようとしても無理でしょう。一緒に考えていけばいいよ」と話しをしました。すると、里子がじっと聞いてから、ほっとしたような顔を見せました。何か里子の肩の力が抜けたように感じました。

その辺りから、里子のモノを取って隠す、リスやハムスターのような行動が驚くほど減少しました。何かを隠すと里子の行動が不審になるので、いつも何かしたかなという直感が働くのですが、今はそれが起きません。モノが動いている様子も見当たりません。そして、児童相談所の心理士の方が家庭訪問の際、モノを隠すことについて質問すると、「最近はしていない」と答え、どうして？と聞かれると「する必要がないから」と答えたそうです。その返答を聞いて、理由はわかりませんが、きっとそうなのだろうと納得する私がいまいました。

里子は、生活の場所が細切れになっているように思っているような所があり、学校や放課後等デイサービスで起きたことは、家には関係ないと言い張りました。その場、その場で凌いでいて、そのそれぞれの場所が連動していないような印象を受けます。そして、家の中で起こったトラブルについては、「他の人には言わないで」と言うことが多く、隠して何事もなかったかのように過ごそうとする感じです。その場所ごとで完結させて終わらせることが安全で安心に過ごす方法だったのでしょう。学校と家庭は、小学校時代から先生とかなり密にやりとりをして、その様子も見せていたので、観念しているところがあつたようですが、放課後等デイサービスと家庭では、余程のことがない限りバレない、

自分が上手く言ってごまかせると感じていたように思います。

年末にこの子のケース会議が開かれました。共通理解を図っていくことを目的に開催され、里親、学校、放課後等デイサービス、児童相談所が参加して行われました。このケース会議についても里子に誰が参加するのかを伝え、「あなたの困っている行動について大人が皆で大人になった時に困らないようにどうしていいのかを考えるのだよ」「皆が、あなたのことを大切に思ってくれているのだよ」と伝えました。里子は何も答えませんでした。真剣に聞いている感じは伝わってきました。

この子の中で点が線としてつながって生活する事自体に落ち着きを持ち、日々の生活を必死にその場その場で過ごさなくても大丈夫だと感じて欲しいと思います。

年明けに母方の祖母も交えて家族旅行に行きました。楽しい旅行ですが、里父の後を付いて回っていた里子が、私に対して「何で来るの」と言ったので、「その言い方はないよね」と叱りました。前までだったら、里子がボソッと腹が立つことを言い返して、もっと状況が悪くなって、暫くお互いに口を聞かなくなっていたと思います。今回は、それ以上言い合いにならず、お互いに距離を置いて過ごし、約1時間後の朝食時に里子が電気ポットの出し方がわからずに困っていたので、私が給湯ボタンを教える助け船を出すと、そこからはいつも通りの関係に戻りました。この間合いは、親子っぽいなと感じました。こういう関係回復の仕方は、今までになかったものです。関係が勝ち負けではなく、休戦後の回復という過程を共有し始めているのでしょうか。

外でよく出る行動

家では、モノにまつわる行動問題が起こっていましたが、学校や放課後等デイサービスでは全く見られないそうです。それより気になるのは、コミュニケーションの仕方だと口をそろえて言われます。この子にいい所があると知っている友達は、ちょっとした悪態をついても仕方がないなあとわかってくれるそうですが、里子をよく知らない子は、嫌な事をされたり言われるから、遠ざけたい存在になっているそうです。

この上手いこと、受け答えができない感じは想像がつきます。家でも、一緒に住みだす当初から今もなお続いている部分です。家では、何か言われても返事をしない、しても「はいはい」「あっ、そう」「ふーん」「そだねー」と人を馬鹿にしたような言い方になり、相手に対していいことを言わないで、欠点と思われるような揚げ足をとるようなことを言う。モノを置くときに投げつけるようにする。人からひったくるようにモノを取るといった感じです。これらの行動が良くないとわかっているにもかかわらず、他のやり方を取り入れるには気恥ずかしい。いつ



ものやり方が落ち着くという印象を受けます。本当は、皆と仲良くしたい、嫌われたくないという気持ちを持っていると痛い程伝わってきます。優しくされると嬉しくなって、近づいてきて、「これ〇〇するで」と偉そうな言い方になりますが、甘えているのだなと感じます。

よく人は、例えそれが上手くいかない方法でも、慣れ親しんだ行動を取ることで安心しようとするといいます。里子を見ていると、まさにその感じで、いつまで経っても悪態を変えられないもどかしさがあります。いい子でいてはいけない、自分は悪い子なのだから、悪い事をし続けないとでも思っているかのようです。他者がしたことでも、悪い事は取り入れるが、いいことは取り入れない。大人に止めなさいと言われてもやり続けるのは、何かへの抵抗でしょうか。言われれば言われるほど、止められなくなります。

母の言うことは聞かないけど父の言うことは聞いていると主張する里子ですが、父が言ってもその行動を止められるわけではありません。それを言われると私はイラっとします。そして、里子は自分を落ち着かせるために、何かをいじりだします。それは、現状を直視しないための手段のように見えます。その里子に諭していくと、投げやりに「べつに」「どうもしない」「鬱陶しい」「変わらなくていい」となります。自分からは、何も言い出せない。止めなさいと言われてたことをひたすらし続け、自分は何をしたらいいかわからなくなる、そして自分はどうしたいのか全く見えていないという様子に見えます。里子は、目の前の出来事に対応する事だけで終わる、そんな感じです。

真剣に大人から怒りをぶつけられた方が、降参する形で謝れるのかも知れません。やはり、ベースはヒエラルキーでしょうか。どちらが勝つか負けるかで受け答えも変わっているようです。勝つか負けるかでしていることは、受け入

れではなく反応なのでしょう。そこでの降参は、パワーゲームの学習にしかありません。毅然とした大人の態度に出会った時、それを受け入れる体験がいるのではないかと思います。どのようなやり方があるのか、思いつきません。この子の生きてきた術だとしたら、根は深いと考えられます。この辺りが、誰かを頼ろうとしない部分につながっているのではないのでしょうか。

この子のためにと思っている大人が、里子にこの反応をされ続けたら、辛くなります。大人側が破綻しないために里子とのほどよい距離感、気持ち面のドライさを保つように心がけた方が長続きすると思います。しんどい生き立ちをしてきた子だからこそ、愛情を注がないといけないと必死になってしまいがちですが、だからこそ冷静に対処するしかないと感じます。乳幼児ならギュッと抱きしめることもできますが、思春期の異性の子は、抱きしめてというわけにいきません。単純な話でなくなっている子どもに対してどう向き合えばいいのか、向き合い続けられるのか。どのような言葉をかけ続けていけばいいのか、何を流し、何に気をつけ、何を受け入れ、何を毅然と対応すればいいのか迷路に入っている気分です。

終わりに

里子との暮らしは、禅問答のようです。里子の状態は透けて見えるようになってきたような気がしていますが、どう手を打てばいいのかわかりません。一般的に子どもは不安になると信頼できる大人に本能的にくっつきに行きますが、里子は、自分に近寄ろうとされること自体が不安でたまらなくなるのではないかと感じます。里子は、関係が深まっていくと壊すような行動を取ることを繰り返してました。刺激が入ると行動がいい所で止まらずにエスカレートをし

て問題化していく。どこまで制限をし、どこまで自主に任せるべきか。この子が能力的に何を理解し、何が理解できないのか、育ちの中で何を学び、何を手掛かりに生きてきているのか、何を恐れているのか、ほっとする時があるのかなのか、里子の中に何が起きているのか、そして私達大人はあなたに何をすればいいのか、そしてできるのか。この迷路の出口が見つかるというのですが、ただ今模索中です。

里子の周りには大人たちは、皆で首を傾げている状態です。いろいろと試みても里子が変わっていかない姿を見ていると手ごたえを感じられない。その背後に何かあるのかを皆で考えていこうとする姿勢が求められるのでしょうか。大人側の苦しみを簡単に解決する方法は、里子を手放すことですが、里子に取っていい事が起きないだろうと誰もが思うので、そうではない方法で頑張ろうとしています。でも何をしたらいいのかわからない、誰も正解がわからない息苦しさがそこにあり、楽になりたいと思ってしまう心の動きが出てきます。そこを責めるのではなく、認めていく必要があるように感じます。

障害児サービスのコーディネーターから、放課後等デイサービスの事業所を変えた方がいいのではないかという話が出たので、「今の事業所ではもう無理だと言っているのですか？」と尋ねましたが、「そんな話はありません」と言われました。デイサービスで暴れてしまったこともあり、利用を断られても仕方ありませんが、一緒に踏ん張ろうとしてくれています。その中で、ほんの少しの一点の光が見えると、大人たちは文句なしに頑張れるのでしょうか。

そして、もう一つしていかなければならない作業は、大人側の自己覚知です。里子の行動の何に自分がざわつくのかを知っていくことが必要だと思います。それは、自分が馬鹿にされたように感じる事なのか、懐いてもらえない敗北感か、この子の特別な存在になれていないこ

とへの無力感か、里親だけでなくこの子の周りには大人は問うことが要るのだと思います。それをしないと、里子の存在自体がトリガーになってしまいます。大人一人ひとりもそれぞれの生き様があり、嬉しいことも悲しいことも、目を背けたいことも経験しています。誰にでも弱点があります。そこを上手く突かれています。里子は、本能的に相手の弱点を突くことに長け、その一瞬は勝利したように感じられるのかも知れません。その後で嫌と言う状況に陥るのですけどね。勝ち負けではない人間関係を教えていくのは、骨が折れます。いい方法があったら、是非教えてください。

